



●第3回和歌山あいあい自然キャンプ報告●

## 福島の子どもたちに「保養」を

8月5日から11日までの7日間、和歌山県田辺市のカトリック紀伊田辺教会を会場に、「第3回和歌山あいあい自然キャンプ」がおこなわれた。福島県の子どもたちが海や川で自由に遊べないため、「さよなら原発の会」がサマーキャンプを準備し運営してきて、今年は3年目である。

福島に住む移住女性とその子どもたちは、「言葉の壁」があって、保養プログラムになかなか参加できない。そのためEIWANは、全国の教会や市民団体に保養受け入れを呼びかけ、それに応じてくれたのが、カトリック大阪大司教区の神父・シスター・信徒たちが作っている「さよなら原発の会」である。同会が、保養プログラムの企画・準備・実施、そして経費のすべてを担ってくれている。

これまで第1回、第2回は保護者が同行していたが、今回は中国やフィリピンにルーツをもつ子ども(小2から中1の6名)だけの参加。そのためEIWANの佐藤さんが子どもたちの「送り」担当で、私は「迎え」担当となった。



私は8月10日、飛行機と電車を乗り継いで紀伊田辺教会までおよそ8時間の道のり。降り立った紀伊田辺駅は、こぢんまりとした可愛らしい一軒家のような小さな駅。白い壁にカラフルな花柄と黒影のイラスト、ドーマー付きの黄色い屋根。街全体は、京都のような昔の作りを守られている雰囲気。教会は、海岸に道を挟む少し高台に静かに佇む。

ボランティアの摂南大学の学生と子どもたちは温泉めぐりに出かけたので、神父とシスターが私を待っていてくれた。子どもたちやスタッフは教会隣接の建物に宿泊させていただいたようで、1階に入ると大きなホールにテーブルや椅子が並べられて食事やワークス

ペースとなっていて、2階の大部屋は寝どころ。

現地のスタッフ、神戸や大阪からのボランティアの方々がバーベキューの準備にバタバタとしている間に、子どもたちが帰って来た。学生たちも準備に参加して、神父の手作りポテトチーズオーブン焼きが大好評。山盛りの焼肉や焼き野菜が、あっという間になくなった。

夕食後は、大学生たちがキャンプで行ったところで撮った写真を、音楽付きコメント付きの映像で上映してくれた。

8月5日——子どもたち6人が到着。みんな元気にキャンプ・イン。

8月6日——学生ボランティアに守られて、海水浴を楽しむ。

8月7日——1時間以上海岸沿いに歩いて、日置川周辺の地層観察。午後は、黒潮の流れを見るクルーズ。

8月8日——磯浜の生物採集と観察。午後は自由時間、夜は花火。

8月9日——海水浴を楽しみ、“イルカ”と遊ぶ。午後は、拾った貝殻などを使い紙粘土でランプを作る。灯りを入れると素敵なランプとなり、良い記念品となった。

8月10日——平草原公園の約2キロの遊歩道に沿って、アスレチック。

どの写真も、子どもたちの笑顔が真夏日のように眩しく輝いている。1週間の思い出が目の前に流れて、思わず涙する子どもたち。制作した学生たちも、私もウルウルになって感動した。

運が良く、大きな花火大会が湾の向こう岸で打ち上げられ、子どもたちも、いつも寄りそってくれた大学生のお兄ちゃんお姉さんたちも、海上に上がる花火を

見上げて、ステキなフィナーレとなった。お互いに明日の別れを意識して連絡先を交換したり、手をつないで離れたくないと惜別の情がありありと顔に描かれていた。

毎日子どもたちは夜9時に就寝消灯、9時半から主催者とボランティア学生の打ち合わせミーティング。私も同席させていただいた。

学生たちがびっしり書かれたノートを開き、その日の感想と反省点、子どもたちの様子などを発言した。それから翌日の予定を再確認して役割分担を決め、1時間ほどで終了。それからお酒やつまみ類を持ち出して交流会。オンオフがあって、学生たちもすっかり打ち解けた様子。

最終日はあいにくの雨、子どもたちは涙目になって、



帰りの電車でも静かだった。

子どもたちは、お盆休みでごった返しになっている大阪駅、東京駅の乗り換えでは私にびったり付いて移動。やっと郡山駅に着き、お母さんお父さんの顔を見たら、笑顔になった。無事に子どもたちを届けて、私もほっとした。

たった1週間で子どもたちと、ボランティアの大学生やスタッフにできた絆をすごく強く感じ、感謝の気持ちが胸を熱くした。来年もその先も、この企画を続けてほしい。原発事故から8年目に入った今でも、福島の子どもたちには心身とも「保養」が必要なから。

● 裘哲一（EIWAN運営委員）

## 白河で初めて 外国人と市民の交流フェスティバルを開催

白河市では震災後、月2回、EIWAN日本語サロンを開いている。日本語教室がなかった白河地域で、フィリピン人女性たちの要望で日本語サロンを開設した。そのうち学習者は中国、南アメリカ……と多国籍化し、さらにこの1年間は、ベトナム人技能実習生が急増した。その中には、会社の寮から白河サロンへ自転車で1時間もかけて来る技能実習生もいる。

このように必死に日本語を学ぼうとしていることをはじめ、白河市とその隣接町村で暮らしている外国人住民のことを、地元市民にもっと知ってもらいたい、日本人と外国人との出会いの場を作りたい、という思いから8月26日、いつも日本語学習に使っているマイ

タウン白河で「白河からふるフェスティバル」を開催した。

企画と準備は、日本語サロンのサポーターたちが夏休みを返上して担ったが、当日の出演者と調理者は、みんな学習者のフィリピン人・中国人・ベトナム人である。

第一部のプレゼンテーションでは、パワーポイントを使ってフィリピン、ベトナム、中国の文化を学習者が紹介してくれた。

第二部のファッションショーでは、それぞれ民族衣装を着て登場。中国については、須賀川から駆け付けてくれた「つばさ～日中ハーフ支援会」のお母さんた

ち10人が友情出演。

そして第三部のアジア料理ではフィリピン、ベトナム、中国の家庭料理、計300皿を用意したが、ほぼ完食。

そして会場には、白河サロンの日本語学習やカラフル食堂などの活動風景の写真や、EIWANの県内の活

動を紹介するパネルを展示した。

参加者は120人を超え、そのうち半数は日本人。アンケートには「楽しかった」「こういった経験があまりなかったので、来て良かった」とあった。また、「とてもたくさんの参加者がいて驚いた」「白河に多くの外国人がいることを知り、驚いた」と書いてあった。



今回のフェスティバルには、白河市／福島県国際交流協会／福島民報社／福島民友新聞社が後援してくれたが、とくに白河市は、市内初めての多文化交流イベントのチラシを全戸に配布してくれた。

あるシンクタンクの全国調査によると、この1年間で国際交流をテーマにして外国人が多く参加するイベントに、「全く参加していない」と回答した日本人は79.1%にもなっていて、また、外国人に対する日本人の認知度も関心度も低い現状が報告されている（三菱UFJリサ

ーチ&コンサルティング「外国人とともにある国・地域づくりに関するアンケート調査」）。

白河市は、近年ベトナム人技能実習生が増えているとはいえ、外国人住民数544人という、いわば「外国人過疎地域」である。そうであるが故に、今回のフェスティバルを通して、日ごろ日本社会では周縁化され「見えない人びと」とされている外国人住民の存在とその暮らしを可視化することが、まず大切だと確信した。

●佐藤信行（EIWAN 運営委員）

## 学習者たちの「白河フェスティバル」感想文 \*原文のまま

- ◆私はベトナムから来て2年ぐらい日本に住んで、初めてフェスティバルに参加しました。ベトナム、フィリピン、中国のファッションと文化を紹介して、とても綺麗でした。日本で働いたり勉強する他の外国の人とも、いろいろな話をしました。そして、各国の料理をたくさん食べられました。自国の料理もあり、私は故郷を思い出させられました。このフェスティバルはたいへん役に立ち、皆は他国の異文化について互いに交流出来ました。
- ◆約6ヶ月、日本語サロンで日本語を勉強しています。初めて国際交流イベントに参加するので、私はベトナムの民族音楽を演奏したりベトナムの伝統料理を作ったりすることを少し心配しました。料理については、前日にムーンケーキを作りました。ベトナムでは中秋節にいつも作りますし、食べやすいからです。演奏も成功しました。来年もこのようなイベントが開催されることを願っています。
- ◆日本へ来て1年です。今は日本語を勉強しています。フェスティバルはとても楽しかったです。このイベントで、自分の国ばかりでなくフィリピンや中国などいろいろな国の人も会いました。本当にありがとうございました。
- ◆フェスティバルに参加しました。朝10時にEIWANの先生たちと様々な国の人たちが集まって会場を準備して、楽しかったです。今回のフェスティバルのおかげで、私はさまざまな国の友達と交流して、お互いの文化を分かるようになって、親くなりました。これからそのような活動があったら、ぜひ参加させていただきたいと思います。

# 福島サロン、「晩秋の山形」バスツアー

これまでEIWANでは、福島サロンと白河サロンとの合同で年1回、バスツアーを実施してきた。しかし、日本語サロンの卒業生(?)も含めて参加者が増え、昨年から人数を調整するのに一苦勞となった。それでも、サロン新学期になると、学習者たちから「今年のバスツアーはどこに行くの?」と聞かれる。学習者の移住者にとってみれば、家族で遠出することはあっても、あるいは同国人たち数名で観光地めぐりをするのがあっても、日本語サロンに集うさまざまな国籍の学習者とサポーターたちの大人数で旅行するのは、得がたい「日本体験」であるし、職場や家庭での「いつも無事平穩」とは言えない日常生活からリフレッシュできる空間なのであろう。

そこで私たちは今年から、福島サロンと白河サロン、別々にバスツアーを実施することにした。



いま福島日本語サロンでは、週1回の木曜クラスと月2回の土曜クラスを実施している。10月13日、今回のバスツアーには、その学習者と家族、サポーター、計25人が参加した。天気にも恵まれ、福島→最上川舟下り→加茂水族館と移動しながら、山形の歴史や自然を満喫することができた。

特に「最上峡芭蕉ライン舟下り」は、船頭の舟唄を聴きながら雄大な自然の景色を楽しむことができた。松尾芭蕉が「五月雨を集めて早し最上川」と詠んだ最上川は、NHKテレビドラマ「おしん」のロケ地として

も有名な場所。心地良い風に当たりながら昔の人々の生活を想像できる貴重な体験でした。



約30分間の船下りを終えた後、昼食をとって、鶴岡市にある「加茂水族館」に。

ここは世界一のクラゲ水族館として有名だそうです。この水族館に来る前までクラゲがこんなに可愛くて、癒される生き物だと思いませんでした。種類や形、色も様々でずっと見ても飽きない可愛さ。特に壁一面に設置されていた巨大円形大水槽に浮かぶクラゲは、宇宙空間にいるような錯覚を覚えるほど幻想的で素晴らしかった。

学習者の皆さんも、普段できない様々な体験ができたようで、「とても楽しかった」「よかった」「また、来たい」と大絶賛。山形は「雪国」としての冬のイメージが強かったのですが、今回のツアーで今まで知らなかった山形の魅力を知ることができました。

●梁姫淑(福島サロン・サポーター)

**今年も、ご参加、ご支援、ありがとうございます。**

**2019年も、さまざまなプログラムにチャレンジします。**

\*\*\*\*\*

## 福島移住女性支援ネットワーク (EIWAN)

〒960-8055 福島市野田町2-3-2 神野ビル3F東 (JR福島駅西口から徒歩7分)  
電話 080-8215-1556 メール eiwan311@gmail.com  
ホームページ <http://gaikikyo.jp/shinsai/eiwan>  
フェースブック <https://www.facebook.com/eiwanfukushima>

**送金先** 郵便振替口座番号：00920-0-144820  
口座名称：福島移住女性支援ネットワーク

\*\*\*\*\*